

## 報告

## ワークショッププログラム

「日本のベトナム関係アーカイブズ  
ベトナムの日本関係アーカイブズ」参加記

A participation Report about Workshop “Historical documents about Vietnam in Japan and Japan in Vietnam”

川田 恭子

Kyoko Kawata

## はじめに ベトナム国家人文社会大学—学習院大学との学術交流について

2018年11月24日、学習院大学とベトナム国家人文社会大学ハノイ校アーカイブズ・文書管理学部合同のワークショップが行なわれた。両校合同のワークショップは3回目となる。学習院大学とベトナム国家人文社会大学との交流は、長年に渡り、2012年12月には学習院大学、ベトナム国家人文社会大学、そして韓国の明知大学の三校共同シンポジウムを開催し、大学間交流協定が締結された。2015年からは毎年11月に、ベトナム国家人文社会大学ハノイ校からの訪問を受けている。対して、アーカイブズ学専攻も2013年度と、2017年度に研修旅行でベトナム国家人文社会大学アーカイブズ・文書管理学部を訪問、学生同士の研究成果を相互報告している。

そして、本年度はベトナム国家人文社会大学アーカイブズ・文書管理学部教授のダオ・ドック・トゥアン先生を筆頭に先生方の訪問を受け、共同ワークショップの開催となったのである。

大学同士の交流は近年にはじまったが、日本とベトナムの関係は、古代からはじまっている。日本においては、12世紀に編纂された『東大寺要録』に現在の中部ベトナムにあたる林邑の僧が来朝したと記述が残っており、16世紀には盛んに交易を行っていた様子が長崎奉行所の役人近藤重蔵が作成した「外蕃書翰」（紅葉山文庫旧蔵）をはじめ多くの文書に残されているという<sup>1)</sup>。

日越の関係は長いが、現在のベトナム社会主義民主共和国と日本が国交を結んで、2018年で45年になる。それを記念して、国立公文書館では特設サイト「日越外交関係樹立45周年記念プロジェクト 日本とベトナム—きざまれた交流の軌跡をたどる—」を開設してい

1—国立公文書館 日越外交関係樹立45周年記念プロジェクト 日本とベトナム—きざまれた交流の軌跡をたどる—では、古代から現代までの日越交流の記録がデジタルアーカイブで読めるようになっている。  
[www.archives.go.jp/event/jp\\_vn45/index.html](http://www.archives.go.jp/event/jp_vn45/index.html) 2018.12.11確認

る。本ワークショップでは、特別サイトに関する報告も行なわれた。

## ワークショップの構成

ワークショップのプログラムは以下の通りであった。

13:00	開会挨拶	保坂裕興 (学習院大学大学院アーカイブズ学専攻教授)
13:05	趣旨説明	武内房司 (学習院大学大学院アーカイブズ学専攻教授)
13:15	〈司会〉武内房司 〈通訳〉宮沢千尋 (南山大学人文学部教授)	
	“Japanese Disarmament in Vietnam after the World War II Through Records and Archival Documents in Some Vietnamese Archives”	ダオ・ドゥク・トゥアン Dao Duc Thuan (ベトナム国家人文社会大学アーカイブズ・文書管理学部)
13:55	“ Archival Documents about Indochina-Japan Relations in the World War II Era (Case of the Haiphong-Yunnan Railway)”	カム・アイン・トアン Cam Anh Tuan (ベトナム国家人文社会大学アーカイブズ・文書管理学部)
14:35	“Between two shores : The construction of an archival corpus on Japanese-Vietnamese mixed families and their children (1930-1975)”	フレデリック・ルスタン Frédéric Roustan (エクス・マルセイユ大学アジア研究所)
15:15	コーヒーブレイク	
15:35	〈司会〉下重直樹 (学習院大学大学院アーカイブズ学専攻准教授) 〈通訳〉チャン・ティ・ミー (東京外国語大学大学院博士後期課程)	
	“Vietnam-Japan relations since the end of 2nd World War to 1973 through archival documents of the Prime Minister's Office fond at Vietnam National Archive Center III”	グエン・ホン・ズイ Nguyen Hong Duy (ベトナム国家人文社会大学アーカイブズ・文書管理学部)
16:15	「日越外交関係樹立45周年記念webサイト「日本とベトナム－きざまれた交流の軌跡をたどる」をめぐって」	小原由美子 (国立公文書館首席公文書専門官)
16:45	「第二次世界大戦期の日越関係に関する日本の史料情況」	立川京一 (防衛省防衛研究所)
17:15	「総括コメント」	白石昌也 (早稲田大学名誉教授)
17:35	討論・質疑応答	
17:55	閉会挨拶	高埜利彦 (学習院大学名誉教授)

ワークショップはアーカイブズ学専攻主任の保坂裕興先生のあいさつではじまった。今回のワークショップは、ダオ・ドゥク・トゥアン先生を招いて、学習院大学東洋文化研究所、アーカイブズ学専攻が主体となって準備した。共催として、人文科学研究所からも協力を得ている。

次に、司会の武内房司先生より「日本・ベトナム間の交流の歴史に光をあてようというものである」というワークショップの趣旨説明があった。

最初の報告はトゥアン先生から「アーカイブズ資料から見た第2次大戦後のインドシナにおける日本軍の武装解除問題」をテーマに行なわれた。次に、カム・アイン・トアン先生より「第二次世界大戦中のインドシナ半島—日本に関する記録資料—ハイフォン・雲南鉄道の場合—」というテーマで、日本では未発表の歴史資料を用いた興味深い報告が行な

われた。次にフレデリック・ルスタン先生より「2つの海岸の間で—日本とベトナム人家族とその子どもたちの資料データベース構想（1930-1975）」の報告があった。

アーカイブズ学専攻の学生が茶を点じるコーヒープレイクを経て、ベトナム国家人文社会大学アーカイブズ・文書管理学部のグエン・ホン・ズイ先生から「ベトナム国立アーカイブズセンターⅢ所蔵 首相官邸文書における日越関係—第二次世界大戦後から1973まで」と題する報告があった。続いて、小原由美子氏（国立公文書館首席公文書専門官）より「日越外交関係樹立45周年記念webサイト『日本とベトナム—きざまれた交流の軌跡をたどる』をめぐって」、立川京一氏（防衛省防衛研究所）より「第二次世界大戦期の日越関係に関する日本の史料情況」の報告が行なわれた。

計6本の報告は、それぞれ日越関係に重点をおいたテーマでなされた。1910年の鉄道建設に関するものから、占領期以降の日越ダブルの子どもたちの問題、戦後1954-1970年の日越国交樹立以前の時代をテーマにしたもの、そして日越交流45周年記念ウェブサイト構築に関するものまで、戦前から現在までの日越関係を徹底する内容であった。

## ベトナム国立アーカイブズセンターの利用報告

特に興味深かったのは、ズイ氏のベトナム国立第3アーカイブズセンターの資料をもちいて、日越が正式に国交を樹立する以前の両国の関係を俯瞰した報告である。ズイ氏は「自分は歴史学者ではなくアーカイブズの専門家である」と冒頭にあいさつし、資料を利用し、そこから読みとれた結果に重点を置いて報告した。

報告内容の前に、ベトナムの記録管理についてかんたんにまとめたい。ベトナム社会主義共和国政府の公文書は、ベトナム国家記録文書局が統一的管理を行なっている<sup>2)</sup>。文書局が指定した公文書が一定期間（10年）経過後に国立アーカイブズセンターに移管されることになる。ハノイ市の国立第1アーカイブズセンター（1962年設立）は、おもに15世紀から1945年までの文書・書籍類が収められており、1802年に成立した阮朝のアーカイブズやフランス占領期の資料などを所蔵している。新しい公文書が移管されることはない。

現在の政府が作成した公文書は、地域によって3つの国立アーカイブズセンターに振り分けられる。南部がホーチミン市にある国立第2アーカイブズセンター（1976年設立）に移管され、北部がハノイ市にある国立第3アーカイブズセンター（1995年設立）に移管される。なお、国立第4アーカイブズセンター（2006年設立）には、中部高原地方の記録が移管されている<sup>3)</sup>。

2—ベトナムの公文書管理については、次の論文 米川恒夫 「ベトナムの公文書館制度について」『アーカイブズ』26号（2007年1月号） 国立公文書館 p57-72および2017年アーカイブズ学専攻訪問時の質疑を参考にした。

3—渡辺悦子 「日本・ベトナム外交関係樹立45周年プロジェクト「日本とベトナム：きざまれた交流の軌跡をたどる」webサイトについて」『アーカイブズ』70号（2018年11月号） 国立公文書館 [www.archives.go.jp/publication/archives/no070/7993](http://www.archives.go.jp/publication/archives/no070/7993) 2018.12.11確認

つまり、ベトナム国立第3アーカイブズセンターには、北部の中央機関の公文書が収められているわけである。そのなかでも大きなフォンドの一つに首相官邸資料 (the Prime Minister's Office fond) がある。ズイ氏は第二次世界大戦後から日本との国交樹立前の時期に焦点をあて、首相官邸フォンドから日越関係が示された資料を抽出、時代ごとに描かれている日越関係について分析したと語った。

以下、ズイ氏の報告内容を示す。

彼は、戦後から日越国交正常化までの時期を三つにわけ、それぞれを論じている。



写真——ベトナム国立アーカイブズセンターの利用について報告するグエン・ホン・ズイ氏

(撮影：アーカイブズ学専攻事務室)

#### • 1952-1959 日越貿易期

日越貿易協会が活躍し、ベトナム産の鉱石を日本が輸入するなど貿易が活発に行なわれていた時期である。第3アーカイブズセンターには、この時期に日本人イサム・フジタがベトナム銀行主査へ送った手紙が残されており、東南アジア最初の社会主義国家であるベトナム民主共和国の正しい情報を日本に提供してほしいとくり返し書かれていたと語った。フジタ氏の手紙は、中国にあるベトナム大使館を通じて4通送られており、日越交流の様子をうかがい知ることができる。

#### • 1959-1968 停滞期

この間は、貿易をふくめた交流活動がほとんど行なわれていなかった時期にあたる。その理由として、日本政府がベトナム共和国 (南ベトナム) 政府と戦後処理の条約を調印したことがあげられる。同時に、アメリカがベトナム民主共和国 (北ベトナム) に対して閉鎖政策をとっており、日本がそれを応援していたことも停滞の理由の一つである。こうした背景により、国家間の協定などは結ばれなかったが、わずかに企業間で購買、売買に関する契約が結ばれていたことが記録に残されているという。停滞のピークは1965年4月で、アメリカから日本に対しベトナム民主共和国との貿易活動を停止するよう要求があり、結果、石炭を輸出していたベトナム民主共和国に日本の船がこなくなり、貿易がストップしたそうである。

しかし、交流がまったく行なわれなかったわけではなく、日越共産党にかかわる活動として、ひそかに国民間の交流は行なわれた。日本からアーティスト団が訪れたり、ベトナム国立大学で1人の日本人の学生を受け入れたりなど、細く民間レベルでの交流が続いていた時期とズイ氏は語っている。

### • 1968-1973 非公式な関係の再開と発展期

この期間が、日越国交正常化の前身となる両国関係発展の時期とズイ氏は位置づけている。ベトナム戦争が終結に向かうにつれ、政治事情が変化し、両国の協力関係が進んだ。この時期の日越間の貿易内容を詳述する資料が5年分残されており、なかにはベトナムが積極的に日本人専門官を招き、技術交流が行なわれていたことを示す内容が記載されていた。ベトナムからも日本へ弁護士の団体を送り、司法制度の研修が行なわれたという。こうした人々の活発な交流を経て、1973年9月21日に日越国交関係が樹立した。

戦後から国交樹立までの日越関係資料を調査することで、次の4点の結論を得たとズイ氏は語る。第1に、両国が政治的背景故に慎重を期しながらも交流に積極的に取り組んでいたことが理解できた。ベトナム民主共和国は、当初日本人の専門官を北部に入らせることに非常に慎重で、首相官邸資料内の議事録には、何度も討議を重ねた様子が残されているという。

第2に、政府がそこまで慎重であるにもかかわらず、貿易活動は非常に活発に行なわれていたということである。これは、時代背景として、高度経済成長期を迎えた日本には原材料が必要で、ベトナムは先端技術が必要だったので、専門官の受け入れに積極的だったことがあげられるとしている。

第3に人々の交流についてである。ズイ氏が入手した資料のなかにベトナムの縫製工場建設に関して専門官としてかかわったホリという人物のレポートがあるという。そのなかには、ベトナムの女性の人間性が非常に印象的だと書かれており、最後に「使命は果たしたが、帰国後日本人がよりベトナム人への理解が深まるようにしなければならない」とまとめられていたそうである。こうした民間の人々の交流が、正常化以前の国家間の関係のベースになっていたとズイ氏は指摘する。

最後に、日越関係全般に関する研究は多いが、戦後から1973年までの日越関係については、いまだ研究が少ないと語っている。ズイ氏が調査した資料は、すべてベトナム国立第3アーカイブズセンターに所蔵され、公開されているものである。日本側にも同様に記録が蓄積されているはずで、「日本ではこの間の研究は進んでいるのだろうか」と問題提起をして、ズイ氏は報告を終えた。

交流会で、単一の組織の資料群をなぜ時代ごとにわけて分析したのかを尋ねると、国立アーカイブズセンターでは、記述はフォンドレベルしかなく、そこから1枚の資料を見つけてという作業を続けなければならないという回答を得た。日越関係を見通すために、あえて時代ごとの分類を行なったということである。

## おわりに 国を超えたデジタルアーカイブ構想と国際記述標準の可能性

討議の場で、トゥアン先生よりベトナムと日本そしてフランス三国の連携をより緊密にするために、共同デジタルアーカイブ構想が語られた。ベトナムにとって、日本は古くか

ら貿易を中心とした交流を行なってきた国であり、フランスはかつての宗主国である。国立公文書館のプロジェクトをさらに発展させた越日仏三国合同デジタルアーカイブ構想を樹立したいという熱意ある提案であった。

実現のためには各国独自の文書管理を超える共通の言語が必要になるであろう。そのために考えてみたいのは、アーカイブズ記述の国際標準である。

小原氏の報告のなかで、国立公文書館の日越45周年記念ウェブサイトでは、資料について共通して記述する項目はアーカイブズ記述の国際標準であるISAD (G) を参考したという報告があった。ISAD (G) は、異なる機関に所蔵されている資料をインターネットを通じて共有することを目的としている。記述標準を利用することで、館の独自性を超えて共有の項目を作成、記述することが可能になる。越日仏三国合同プロジェクトのためには、国際標準をもちいての記述が有用になってくるのではないだろうか。

ズイ氏も1点ずつの資料をキーワードから探すことには、ベトナム国立アーカイブズセンターは非常に検索機能が充実しているが、関連する資料を探すためには、日本の階層構造が示されたウェブサイトのやり方のほうが早いだろうと語っていた。

『記録史料記述の国際標準』には、「記録史料へのアクセスや記録史料のコントロールに際して複数の記録史料所蔵機関の連携や統一性が求められる場合には…中略…それらの情報の標準化ないし共通言語化が必要となる」<sup>4)</sup>と書かれている。国を超えての連携に必要とされるのは、この共通言語である。そのために、記録史料記述の国際標準であるISAD (G) を試用する価値はあると考える。

インターネットを利用し、国を超えてアーカイブズが利用できるようにしようというトゥアン先生の問題提起は、非常に重要である。実現するためにも、記述についての共通理解を深める交流を行なうことが重要になってくるであろう。

高埜利彦学習院大学名誉教授は、最後のあいさつで次のように語っていた。

「日越の交流が表面的、一方的なかたちにならないためには、お互いの文化を歴史を通して知り合うことが重要です。そのためにも、アーカイブズの所在、情報交換ができることが重要だと改めて感じたところです。今後も学問的に交流を継続していくということが意味を持って行くと思います。」

記録を共有することで、国家を超えて互いに理解しあうことができるという言葉は重い。次の機会には、ぜひインターネットを通じて互いの資料を利用するための記述についての合同討論が開催されることを期待している。